家族への手紙コンクール入賞者

日頃、面と向かうとなかなかうまく伝えられない思いや感謝の気持ちなどがつづられた手紙が、829通寄せられ、次の皆さんが入賞しました（敬称略）。

問　生涯学習課（☎62-1036）

【最優秀賞】

『ばあば、ぼくと手をつなごうよ』
光岡明慧（住吉小6年）

【優秀賞】10人

『妹へ』
競蓮奈（双葉小2年）

『おねえちゃんへ』
平塚武（日高小2年）

『ママいつもありがとう』
太田拓真（住吉小5年）

『おじいちゃんに、「ありがとう」』
坂野莉央奈（住吉小5年）

『大切な弟へ』
安間優羽（刈谷南中1年）

『ぼくの小さな宝物』
阿知波咲人（刈谷東中1年）

『心に届け』
田畑海音（刈谷東中1年）

『共に持続と挑戦』
神谷美雨（雁が音中1年）

『僕の極秘情報教えちゃう』
高田遥生（雁が音中1年）

『ありがとう、おばあちゃん』
二宮蒼衣（刈谷東中2年）

最優秀作品『ばあば、ぼくと手をつなごうよ』

光岡明慧

ぼくは、親せき中の孫の中で一番初めに生まれた。だから、ばあばにとっては初孫というやつだ。母から聞く幼い頃のぼくの思い出話には、必ずと言ってよいほど、ばあばも一緒に登場する。動画を見れば、ばあばにぼくが手をつないでもらい、よちよち歩いている。危なくないように手をつないで一緒に歩き、社会のルールも教えてくれた。分からないこともたくさん教えてくれた。ばあばの話はいつもおもしろいし楽しい。

時が経って孫も増えて、ばあばの両手は妹やいとこたちでうまってしまった。ぼくはお兄ちゃんと呼ばれるようになり、ばあばと手をつなぐのが気はずかしくなった。年上のしっかり者の兄として、妹やいとこの前では手をつながない。

今、ぼくは小学六年生。身長はぐんぐん伸びてきて、ばあばと同じぐらいの背になった。それでも、ばあばはいつもぼくの心配をしてくれる。うれしいけれど、大丈夫なのにと思ってしまう。一緒に旅行に行った高原では、ぼくの歩くスピードとばあばの歩くスピードがちがって、どんどん離れてしまった。ぼくは立ち止まり、ばあばを待った。地面がでこぼこしていて、ばあばは歩きづらそうだ。あっ、危ないとひやっとした。ばあばがつまずきころびそうになった。かけ寄って、「ばあば大丈夫？」と聞くと、ばあばは、ふうっと深呼吸してから「あさとくんに心配かけちゃって。いつの間に逆転しちゃったんだろうねえ。あさとくんは大きくなったんだねえ。」と笑っていた。ぼくは昔みたいに手をつなぐことを思いつき、それからは山道を一緒にばあばとゆっくり手をつないで歩いた。昔、ばあばがぼくに、そこは危ないよと教えてくれたみたいに、今度はぼくが、「下に枝があるよ、土がくぼんでいるから気をつけてね。」と話しながら歩いた。久しぶりにばあばと手をつないで歩けてうれしかった。

だからね、ばあば、またぼくと手をつないで歩いて、いっぱい話そうね。

青少年作文コンクール入賞者

心に残った出来事や、私を変えた一言など、自由なテーマで作文を募集したところ、790人から応募があり、次の皆さんが入賞しました（敬称略）。

問　生涯学習課（☎62-1036）

【最優秀賞】

『音の可能性』
大島帆夏（刈谷東中3年）

【優秀賞】10人

『おてがみ』
荻山穂高（平成小1年）

『わたしの周りのやさしい人たち』
岡本陽和（富士松南小4年）

『お母さんの本当の気持ちと笑顔』
塚本安那（富士松南小5年）

『「正しい」と「まちがい」』
加藤有莉（富士松南小6年）

『募金を一円でも多く』
塚本愛末（富士松南小6年）

『成長～イチゴとともに～』
岡崎香綸（刈谷東中2年）

『命の終え方について』
横山礼華（刈谷東中3年）

『動物実験』
尾崎まりん（依佐美中3年）

『母とお弁当』
小島優奈（朝日中3年）

『空気ではなく言葉で』
服部海斗（ジェイテクト高等学園）

最優秀作品『音の可能性』

大島帆夏

私は今、合唱コンクールのためにクラスの自由曲である「虹」の練習をしている。私は二年間、合唱コンの舞台で歌ったことがない。そのかわり、私は私自身の手でピアノをうたわせる。ピアノは「弾いて音を出す」だけではなく、他の力も秘めていると思う。

いつだったか、ピアノの先生に相談したことがある。

「クラスの歌がまとまらないんです」

「そうだねえ。やっぱりピアノの存在は大きいよ。いかに伴奏でみんなを歌いやすくするか、それが重要かも」

この時、クラスに対する思いが強まった。みんなが歌いやすいように私がまず頑張らないと、そんな気持ちが芽生えた。

私が今まで弾いてきたクラッシックの曲はほとんどの曲の主旋律が右手にあるから、右手の高い音を強く弾く。つまり、左手は弱く弾く。だが、伴奏は違った。基本的に右のメロディが出るように、強く弾くのは同じ。しかし、左手によく見られる和音を強く弾くことによって、音の幅と高い声との響きがバランス良くなり、歌いやすく綺麗なハーモニーを生み出せる。つまり、左手のメロディは歌を支える土台ということ。私はそのことを知り、伴奏の際は左手を意識するようになった。今までの私は、ピアノを弾くときは右手を重視していた。それに加えて、私の利き手は右手。だから、それはとても難しいことであった。

二年生の十一月。私たちは大きな壁に直面した。本番一週間前にクラスが二つに割れてしまったのだ。このクラスで行える最初で最後の合唱コン。今までの練習を無駄にしたくなかった。だから私は、クラスのみんなに自分の思いを話した。私は自分の言葉で誰かの心を動かす、そんな力は持っていない。でも自分の思いを必死に話した。みんなの気持ちを一つにすることは最後までできなかったと思う。でも、みんなで合唱コンの舞台に立つことができた。このとき私は、一つ一つの音に込める思いの大切さを知った。

そして今、「虹」の練習をしている。今まで弾いてきた合唱曲と比べるとかなり難しい。その一方で、あることを発見することができた。片手練習をしていると、所々、濁った音が出てくる。そこで試しに反対の手も合わせて弾いてみた。すると綺麗な音になる。私は驚いた。それと同時にクラスのことが思い浮かんだ。誰か一人でも欠けていたらばらばらになってしまう。逆に、全員が一つになればまとまることができる。これは音と一緒だと思った。音には可能性がある、そう思った。

今年は中学校生活最後の合唱コン。小中音楽会出場を目指して、私はクラスのみんなとうたう。技術を上げてくださったピアノの先生。あの時、思いを語るために背中を押してくれた先生。全ての人に感謝して。